

声の交差点

■雪の墓地に妻との日思う

小坂 仁 84歳

(仙台市太白区・史跡ボランティアガイド)

新雪を踏みながら、亡き妻のお墓参りに行った。墓地の形は、ベーターベンが眠るウィーンの中央墓地に似ている。

享年47。墓碑銘が胸を打つ。あまりにも早過ぎる別れだった。妻は敬虔(けいけん)なクリスチャンだった。そして、西館跡(仙台市青葉区)の「隠れキリシタン五郎八姫伝説」の語り部でもあった。

「信仰こそが私の命。キリストの御元に帰りたい」という妻の最後の言葉を思い出し、目頭が熱くなる。

ふと徒然草の一節「命長ければ辱(はじ)多し。長くとも、四十に足らぬほどにて死なんこそ、目安かるべけれ」が頭に浮かぶ。人生は40歳ぐらいまでがちようどいいということだろうか。

私は八十路をさまよう。鎮魂の鐘の音が北風に消えていく。共に聖霊を受けたローマの小さな教会。感動のミサに涙したあの日。契りを結び、支えてくれた妻との25年の短い歲月。神は全てから涙をぬくい去ってください。

天国の妻よ、ありがとう。そして、これからも神の国から、煩惱に苦しむ私を見守ってください。